

「あはれ、衛門督」考

——『源氏物語』における右衛門督をめぐつて——

竹 内 正 彦

一 「あはれ、衛門督」をめぐつて

柏木が死んだ。泡の消え入るような最期であつた。『柏木』の右衛門督の失せ、いとあはれなり——。『無名草子』がそう評する^①ように、女三の宮への恋に殉じた柏木には「あはれ」ということばこそ相応しい。だが一方で、『無名草子』は、「女三の宮の御事の、さしも命に換ふばかり思ひ入りけむぞもどかしき」、「さしも心に染めけむぞ、いと心劣りする」などと女三の宮に固執する柏木のあり方を批判し、さらに「そもあまり身のほど思ひ屈じ、人わろげなるぞ、さしもあるべきことかはとぞおぼゆる」と身のほどを悲観する姿に落胆の色を隠さない^②。『無名草子』には、「柏木の悲劇的な死への同情」^③のため、執心や苦悩などといったものは、むしろ余計なものに映つたようだ。だが、柏木という人物の核心は、

まさにその『無名草子』が切つて捨てたところにある。柏木の死はたんなる恋死ではない。光源氏に対する畏怖や女三の宮に對する執着はもとより、それこそさまざまな要素ががんじがらめにして柏木を死の世界へと引きずり込んでいく。本居宣長が「不義なるふるまひ有て、身をさへいたづらになしぬる」としつつも「此物語をよみて、此柏木ノ君の事を、あはれと思はぬは、心もとなき人ぞかし」と断じたように^④、そのような柏木だからこそ「あはれ」なのであつた。

『無名草子』は柏木の執着を難じつつも「あはれ」と評し、宣長も柏木の不義を認めたくうえでその「あはれ」を論じたが、物語の世界では、柏木の死の真相など何も知らないはずの人びとまでもが「あはれ」ということばを口にしてゐる。

「右將軍が塚に草初めて青し」と、うち口すさびて、それもい

と近き世のことなれば、さまざまに近う遠う、心乱るやうなりし世の中に、高きも下れるも、惜しみあたらしがらぬはなきも、むべむべしき方をばさるものにて、あやしう情をたてたる人にぞものしたまひければ、さしもあるまじき公人、女房などの年古めきたるどもさへ、恋ひ悲しびきこゆる。まして、上には、御遊びなどのをりごとにも、まづ思し出でてなむ偲ばせたまひける。「あはれ、衛門督」といふ言ぐさ、何ごとにつけても言はぬ人なし。六条院には、まして、あはれと思し出づること、月日にそへて多かり。この若君を、御心ひとつには形見と見なしたまへど、人の思ひよらぬことなれば、いとかひなし。秋つ方になれば、この君はるざりなど。

〔柏木〕④三四〇〜三四一頁^⑤

「柏木」巻の巻末には、身分の上下を問わず惜しみ、末端の官人や古女房たちまでもが悲しんでいることが叙述されている。今上帝は管絃の遊びの折ごとに思い出し、誰もが何事につけても「あはれ、衛門督」ということを口にしていることが語られ、光源氏はまして「あはれ」と思い出すことが多いのだとされる。光源氏は抱く「あはれ」という感慨は、もちろん、他の人びとのものとは異なっており、「まして」という語句がそのことを強く印象づけているが、しかし、今ここで考えてみたいのは、光源氏の心の奥

底に去来するものではなく、真相を知らない人びとのなかにどのような柏木像が顕現しているかということである。

「あはれ、衛門督」という言辭について、たとえば、新日本古典文学大系は「物語の読者は前の女三宮へのことづけた柏木の「あはれとだにのたまはせよ」（六頁二行）という遺志が残された人みなに行き渡っている感じを受け取る」と注し、新編日本古典文学全集も「柏木は死を予感したときも女三の宮に「あはれとだにのたまはせよ」（二九一頁）と望んだが、死後の今、世間の人々にそれを言われている」として、生前の柏木が女三の宮に対して「あはれとだにのたまはせよ」（^⑦「柏木」④二九一頁）、「かひなきあはれをだにも絶えずかけさせたまへ」（^⑧「柏木」④二九七頁）などと「あはれ」を繰り返し求めたこととの関連を指摘するが、物語の世界に息づく人びとの視座からは、二人のそうしたやり取りは知り得ないものとしてある。また、清水好子が「彼はたしかに光源氏の威光にひしがれて死んだには違いないが、一方愛惜されるために死んだようにも思える」と述べ、後藤祥子が「ひとときわ優れた美質が、惜しまれて散る美学は、人々の胸を痛ませる度合いにおいて、「あはれ」の極地という他ない」と評するの^⑨もまた、物語展開や柏木のあり方を鋭くつくものであったとしても、物語世界のなかの柏木の評価とはおのずから異なるものであろう。そうした

意味で、「手厚い哀悼は柏木の死が横死と見なしうる性格をもっていたことから、そうした死者の靈魂を鎮魂する意図が働いたと考えてよい」という日向一雅の指摘は興味深いが、光源氏を別にしたとしても、死の真相を知らない人びとが柏木の死をどうして「横死」と見なすことができたかということを明らかにする必要がある。

「あはれ、衛門督」と誰もが嘆いたというその内実を考えるうえで注目されるのが、直前に示される「右將軍が塚に草初めて青し」という詩句である。この詩句によって「あはれ、衛門督」における「衛門督」には「右將軍」がいやおうなく重ねあわされることとなる。

この詩句については、『河海抄』が次のように指摘している。

「本朝秀句」天与善人吾不信右將軍墓草初秋「紀在昌」

「八条」右大將保忠事を作れる詩也「左大臣時平息 母本康親 王女」仍近代といふ也

此韻字本詩は秋とあるを今あらためて青と誦せられたる其心優美なる者歟卯月の比なれば秋の字にては季節相違す青の字にて時分も物にかなひ本詩の心もたかはす眼前の景氣も浮へり詞に庭はやうくあをみいつるわか草みえわたりこゝかしこのすなこのうすきものゝかくれく「真本かくれ」のかた

はよもきもところえかほなりとあり……⁽¹⁾

『河海抄』は、当該表現が、紀在昌が右大將藤原保忠を追悼して作ったという詩句の「右將軍が墓に草初めて秋なり」をふまえたつ、物語場面の季節に合わせて「秋」を「青」と変えたものであることを指摘する。藤原保忠は、左大臣藤原時平の長男として寛平二年（八九〇）に生まれ、延長八年（九三〇）に正三位大納言、承平二年（九三二）には右大將となり、「八条大將」「賢人大將」とも号され、とくに祖父の藤原基経より笙の秘曲「荒序」の相伝を受けて、日本の笙の始祖ともいわれるなど、音楽の才能を発揮しつつも、承平六年（九三六）に四十七歳で没した人物である。⁽²⁾『職原抄』が大將について「唐名羽林大將軍」と注し、「総取二將軍之称一也」とするよう⁽³⁾に、「大將」は「將軍」とも呼ばれることから、漢詩等において「右大將」であつた藤原保忠を「右將軍」と称することは自然なことといえ、物語はこの詩句を引用することによって、「右將軍」たる藤原保忠と柏木とを重ね合わせていこうとしていると認めることができる。ただし、「うち口すさびて」とあるように、この詩句が作中の人物によって口ずさまれたものであることには注意が必要である。新日本古典文学大系が「ここでは「秋なり」を「青し」に変えて夕霧は朗唱する」と注するよう⁽⁴⁾に、この詩句は夕霧によって朗唱されたものと解されるが、この詩句

に込められた慨嘆はひとり夕霧にとどまるものでなく、「高きも下れるも、惜しみあたしがらぬはなき」と続けられているように、物語のなかに息づく人びとに共通するものと見るべきであろう。柏木の死を知った物語のなかの人びとは、そこに藤原保忠の死を重ね合わせて嘆いているのであった。

柏木と藤原保忠。しかし、このふたりを結びつけることはそれほど容易なことではない。当該場面において柏木は「衛門督」として人びとに追慕されているが、「將軍」はほんらい「大将」を想起させるものであった。

このことについて、『花鳥余情』が「衛門督をも唐名に金吾將軍といへは右將軍といふに相違なきなり」と説明する。⁽¹⁵⁾『職原抄』を紐解くと「衛門督」に対して「唐名金吾將軍」との注記が見られることから、たしかに、衛門督を「金吾將軍」とするのは誤りではない。ところが、たとえば『貞信公記』延喜二十年(九二〇)十二月十四日の条には次のような記述が見られる。

十四日、勸學院別當右將軍(藤原定方)、本參所別當左金吾(藤原清實)、仰左中弁(藤原邦基)⁽¹⁷⁾

ここでは右大将である定方が「右將軍」とされている一方で、左衛門督である清實は「左金吾」とされている。そもそも両者が「將軍」という同じ名称で呼ばれていたとすれば、その呼称によって

両者を区別することができない。衛門督の唐名が「金吾將軍」であることは疑いないものの、一般的には、「將軍」といえば大将をさし、衛門督はそれとは区別して「金吾」とされていたと考えるのが妥当であろう。

もしそうであるとすれば、柏木は「右大将」という実態とはそぐわないものと結びつけられていることになるが、一方で、柏木と保忠とをつなぐ逸話も指摘されている。⁽¹⁸⁾

死の直前、柏木は陀羅尼を恐れ、「いであな僧や。罪の深き身にやあらむ、陀羅尼の声高きはいとけ恐ろしくて、いよいよ死ぬべくこそおぼゆれ」と語る(「柏木」④二九三頁)が、『大鏡』にはやはり死の直前の藤原保忠の臆病な逸話が載せられている。

この殿ぞかし、病づきて、さまざま折りしたまひ、薬師經読經、枕上にてせさせたまふに、「所謂宮毘羅大将」とうちあげたるを、「我を『くびる』とよむなりけり」と思しけり。臆病に、
やがて絶え入りたまへば……⁽¹⁹⁾

読經のなかの「所謂宮毘羅大将」という文句を「我を『くびる』とよむ」と誤解して、「臆病」のままに死んでいったとする。待井新一は、両者の死亡年齢の相違にもふれながら、とくにこの読經を恐れるふたりについて次のように述べる。

柏木もその愛執に捕われの身となつてしまったのだ。煩惱の

所為にせよ、人間なればこそその弱点と言えよう。弱点を持つ人間同士として、保忠と柏木の間の、「右大将」「右衛門督」や四十七歳と三十二、三歳との死亡年齢の相違をも超えて、「右將軍……」の詩句で躊躇なく二人を結びつけたのではない⁽²⁰⁾か。

ふたりは、たしかに「弱点」を持つ。しかし、とくに柏木のそれは物語世界の人びとには知られていないものであった。事実、「柏木」巻末の当該場面において、柏木は「あやしう情をたてたる人」と評されており、そこには臆病な柏木の姿など微塵も感知されていないのである。

あはれ、衛門督——。そのように口にした人びとの脳裏に浮かんでいるのは、どのような柏木の姿なのであろうか。柏木が死去したのは権大納言になったのちのことであったが、人びとは「衛門督」と口にする。もちろんそれは、人びとの記憶としてその官職名が深く浸透していたことを意味しよう。「衛門督」という言辭によつて呼び起こされてくるものを分析しつつ、それにもかかわらず、そこに「右大将」の姿を重ね合わせていくことの意義を考察することによつて、柏木亡きあとの物語世界のありようを見つめてみたい。

二 右衛門督の位相

衛門府は、「ゆげひのつかさ（由介比乃豆加佐）」とも称されるように、「弓箭を帯して宮廷諸門の警衛にあたつた戦負の職務」をその源流にもつ⁽²¹⁾。「職員令」によれば、衛門府には、督一人以下、佐一人、大尉・少尉・大志・少志各二人、医師一人、門部二百人、物部・使部各三十人、直丁四人、衛士が配され、衛門督の職務として「諸門の禁衛、出入、礼儀のこと、時を以て巡り検むこと、及び隼人、門籍、門勝の事」が規定されているが、森田悌は、平安中期における衛門府の職掌について、「宮城の守衛ないしその延長としての行幸の際の前駆後殿」、「京城内の巡邏」、「衛士の差配」の三つがあつたことを指摘し、とくに「京城内の巡邏」に関連して「京城内警察として左右衛門府の重要性がクローズ・アップされてくるのは、弘仁年間に検非違使が置かれるようになり、府内の優秀な官人が検非違使を兼摂するようになったことに由来する」とする⁽²²⁾。その衛門府の長官である衛門督には「中納言・参議で兼帯したものが多し」とされ、また、検非違使の別当は、左右兵衛督か、この左右衛門督が兼帯することとなつていた⁽²³⁾。衛門督は、いわば、武力をもつて治安維持にあたる警察機構の中核にあり、「あはれ、衛門督」と追悼される柏木は、その「右衛門督」なので

あつた。⁽²⁸⁾

『源氏物語』における「右衛門督」については、家井美千子に詳しい分析がある。⁽²⁹⁾ 家井は、仁和三年（八八七）から長暦二年（一〇三八）までの左右衛門督の任官状況を調査し、右衛門督から左衛門督に移る事例が見られるのに対してその逆がないことから左衛門督の方が重く捉えられていたこと、また、左右兵衛督を経てきている事例が多く見られることからこれが一つの昇進コースであったと考えられること、さらに、左衛門督には大納言や左右大将に任じられた時点で衛門督を辞す事例が多く見られることなどを指摘したうえで、「左右衛門督は（特に権門の子弟の）参議から中納言にある間に兼任する官であり、大納言となった時にそれを辞す、という一つの出世ルートとなっていたものと考えられる」と述べる。そして、右衛門督は従四位下の官とされるが、実態としては参議か中納言の兼官であり、位も最も低くて従四位上、最後には正二位までのぼる者もあらわれるといった「含みの多い官」であることをふまえ、「若菜上巻で、右衛門督が自分の身分の高くないことを嘆いたというその原因となっているのは、右衛門督という官ではなく、参議という官であったと考えるのが妥当」であり、柏木を「衛門督」とよんだのも「彼の劣等意識を刺激しない好意的な呼び方を『物語』中の人々がしているからであろう」とする。

家井は、「左右衛門督」が「一つの出世ルート」となっていた理由に「左右衛門督の兼ねる場合の多い検非違使別当の役割が影響している」ことを示唆しつつもその分析を避けているが、このことに関し、永井崇大は、「そこにこそ大事な視覚が隠れていたのではないか」としながら、柏木が「検非違使別当としてのイメージをより強烈に醸していた」可能性を重視して、「柏木の死に接した社会は上下を問わずあまねく哀悼を捧げた。それは、検非違使別当が愛され敬われる対象として存在したからである」とする。⁽³⁰⁾ しかし、右衛門督であれば必ず検非違使別当を兼ねるとは限らず、また物語において柏木が検非違使別当であったことをうかがわせる表現を見出すことができないかぎり、「あはれ、衛門督」という言辞に検非違使別当としての柏木像を読みとることは困難である。やはり、そこに「右衛門督」としての柏木が刻み込まれていることは看過できない。そして、あらためてそのことを重く見るならば、むしろ、家井が「右衛門督」を主たる考察対象としながら「左右衛門督」をまとめて「一つの出世ルート」ととらえていることについても検証し直す必要があるように思われてくる。

こころみに、新訂増補国史大系『公卿補任』（吉川弘文館）および市川久編『衛門府補任』（続群書類従完成会、一九九六年）を参照しながら、寛平九年（八九七）から寛弘六年（一〇〇九）までの左

右衛門督の補任状況を整理したものが、『衛門府補任表』である。家井も、仁和三年（八八七）から長暦二年（一〇三八）までの左右衛門督の任官状況を表としてまとめているが、ここでは、『源氏物語』が背景としていた時代により即した状況をとらえるため、醍醐朝から一条朝に絞ることとした。また、左衛門督と右衛門督との相違を明確にするために、それぞれの着任直前と離任直後の主な官職を示すこととした。

これによれば、まず、当該期間における左衛門督は、二十二名数えることができ、これらの人物たちの着任直前の官職は、中納言（十一名）、権中納言（五名）、参議（五名）、非参議（一名）で、中納言・権中納言が多く、また、右衛門督を兼ねていたものが七名いたことが確認できる。左衛門督離任直後の官職については、在任中に薨去した者一名を除き、大納言（九名）、権大納言（五名）、中納言（五名）、参議（二名）で、大納言・権大納言が多いということになり、中納言・権中納言で左衛門督を兼官していたものも、大納言・権大納言になると左衛門督を辞任していることがわかる。したがって、左衛門督については、家井の指摘のとおり「参議から中納言にある間に兼任する官であり、大納言となった時にそれを辞す、という一つの出世ルートとなっていた」ととらえてよいだろう。

一方、当該期間中に右衛門督となる人物は、二十四名（①②源伊陟が再任されているため延べ二十五名）を数えることができるが、これらの人物たちの着任直前の官職は、参議（十九名）、権中納言（五名）、中納言（二名）で、参議が多く、その参議のもののうち、右衛門督在任中に中納言もしくは権中納言になるものが九名いることがわかる。ところが、右衛門督の場合は、離任直後に本官が変わらないものが十三名おり、右衛門督在任中に中納言（権中納言）昇進し、そのまま右衛門督を離任するのが基本であったようだ。右衛門督のあとに左衛門督に転じるものが七名いたが、このように見てくると、参議で右衛門督を兼ね、中納言（権中納言）に昇進したうえで、左衛門督に転じ、大納言（権大納言）となって左衛門督を辞するというのがひとつの典型としてとらえられてくる。では、右衛門督のちに左衛門督となったものたちは、その後どのようなようになっていくのであろうか。

右衛門督について左衛門督に任じられたもの七名の最終官職をやはり『公卿補任』によって確認すると、藤原清貴が大納言、藤原恒佐が右大臣、藤原実頼が摂政太政大臣、源高明が左大臣、藤原師氏が中納言、源重光が権大納言、藤原公任が権大納言となっている。とくに大臣以上に昇進したものが三名含まれていることからすれば、右衛門督になることは、一見、左衛門督と同じく「出

【衛門督補任表】

※以下の表は、醍醐朝から一条朝までの左右衛門督の補任状況をまとめたものである。
 ※作成にあたっては、新訂増補国史大系『公卿補任』(一)および市川久編『衛門府補任』(続群書類従完成会、一九九六年)を参照した。
 ※右衛門督を経て左衛門督になっている人物には網掛けを、左右衛門督在任中もしくは離任後一年以内に薨去している人物は白抜きを施した。

左衛門督

		人名	着任年月	在任期間の位	着任直前の主な官職	在任期間の本官	離任直後の主な官職
醍醐天皇	①	藤原有実	寛平九年(八九七)	從三位↓正三位	參議	參議	參議
	②	藤原定方	延喜一三年(九一三)	從三位	中納言	中納言	中納言・右大將
	③	藤原清貴	延喜一九年(九一九)	從三位↓正三位	中納言・右衛門督	中納言	大納言
	④	藤原仲平	延喜二一年(九二一)	從三位↓正三位	中納言・左兵衛督	中納言	大納言
	⑤	藤原保忠	延長五年(九二七)	從三位↓正三位	中納言	中納言	大納言
朱雀天皇	⑥	藤原恒佐	延長八年(九三〇)	從三位↓正三位	中納言・右衛門督	中納言	大納言
	⑦	橘公賴	承平三年(九三三)	正四位下	參議・右兵衛督	參議	參議・大宰權帥
	⑧	藤原実賴	承平五年(九三五)	從三位	中納言・右衛門督	中納言	中納言・右大將
村上天皇	⑨	藤原師輔	天慶元年(九三八)	從三位	權中納言・右中將	權中納言	大納言
	⑩	藤原顯忠	天慶五年(九四二)	從三位	權中納言・左兵衛督	中納言	大納言
	⑪	源高明	天曆二年(九四八)	從三位	權中納言・右衛門督	中納言	大納言
冷泉天皇	⑫	藤原師尹	天曆七年(九五三)	從三位↓正三位	中納言・左兵衛督	中納言	大納言
	⑬	藤原師氏	天曆一一年(九五七)	從三位↓正三位	權中納言・右衛門督	權中納言↓中納言	權中納言
	⑭	藤原賴忠	安和二年(九六九)	從三位	中納言	中納言	中納言・右大將
円融天皇	⑮	源雅信	安和二年(九六九)	正三位	參議	參議↓權中納言↓中納言	大納言
	⑯	源延光	天祿三年(九七二)	從三位	權中納言	中納言	大納言
	⑰	源重光	天延三年(九七五)	從三位↓正三位	參議・右衛門督	參議↓中納言	權中納言
一条天皇	⑱	藤原顯光	正暦二年(九九一)	從二位	中納言	中納言	權中納言
	⑲	藤原懷忠	長徳元年(九九五)	正三位	中納言	中納言	中納言
	⑳	藤原誠信	長徳三年(九九七)	從三位	參議	參議	※在任中に薨去
	㉑	藤原公任	長保三年(一〇〇一)	從三位↓從二位	中納言・右衛門督	中納言	權中納言
	㉒	藤原賴通	寛弘六年(一〇〇九)	從二位↓正二位	非參議	權中納言	權中納言

右衛門督

	人名	着任年月	在任期間の位	着任直前の主な官職	在任期間の本官	離任直後の主な官職
	① 源貞恒	寛平九年(八九七)	正四位下↓従三位↓正三位	参議	参議↓中納言	大納言
	② 藤原清経	延喜九年(九〇八)	正四位下↓従三位	参議	参議	※在任中に薨去
	③ 藤原清貴	延喜十五年(九一五)	正三位	中納言	中納言	中納言・左衛門督
醍醐天皇	④ 源當時	延喜十九年(九一九)	正四位下	参議・右兵衛督	参議	中納言 ※離任当年に薨去
	⑤ 藤原恒佐	延喜二十一年(九二二)	從四位上↓従三位	参議・左中將	参議↓樞中納言↓中納言	中納言・左衛門督
	⑥ 藤原兼輔	延長八年(九三〇)	從三位	樞中納言	中納言	※在任中に薨去
	⑦ 藤原実頼	承平三年(九三三)	從四位上↓従三位	参議	参議↓中納言	中納言・左衛門督
朱雀天皇	⑧ 源清盛	承平五年(九三五)	正四位下↓従三位	参議	参議↓樞中納言	樞中納言
	⑨ 藤原忠文	天慶三年(九四〇)	正四位下	参議	参議	参議
	⑩ 源高明	天慶四年(九四一)	正四位下↓従三位	参議	参議↓樞中納言	中納言・左衛門督
	⑪ 藤原師氏	天曆二年(九四八)	從四位上↓正四位下↓従三位	参議	参議↓樞中納言	樞中納言・左衛門督
村上天皇	⑫ 藤原朝忠	天曆十一年(九五七)	正四位下↓従三位	参議	参議↓中納言	中納言 ※離任翌年に薨去
冷泉天皇	⑬ 藤原朝成	康保二年(九六五)	正四位下↓従三位	参議	参議	樞中納言
円融天皇	⑭ 藤原齊敏	安和三年(九七〇)	正四位下↓従三位	参議・左兵衛督	参議	※在任中に薨去
	⑮ 源重光	天禄四年(九七三)	從三位	参議・右兵衛督	参議	参議・左衛門督
花山天皇	⑯ 源忠清	天延三年(九七五)	從三位↓正三位	参議	参議	※在任中に薨去
	⑰ 源伊勢	永延二年(九八八)	正三位	参議	参議	樞中納言
	⑱ 藤原道長	永延三年(九八九)	從三位↓正三位	樞中納言	樞中納言	樞大納言
	⑲ 源時中	正暦三年(九九一)	正三位	参議・左兵衛督	参議	樞中納言
一条天皇	⑳ 藤原道頼	正暦三年(九九二)	從三位↓正三位	樞中納言	樞中納言	樞大納言
	㉑ 源伊勢	正暦五年(九九四)	正三位	樞中納言・右兵衛督	樞中納言↓中納言	※在任中に薨去
	㉒ 藤原実資	長徳元年(九九五)	從三位	参議・左兵衛督	樞中納言↓中納言	中納言
	㉓ 藤原公任	長徳二年(九九六)	正四位下↓従三位	参議	参議↓中納言	中納言・左衛門督
	㉔ 藤原齊信	長保三年(一〇〇一)	正三位↓従二位↓正二位	樞中納言	樞中納言	樞大納言
	㉕ 藤原懷平	寛弘六年(一〇〇九)	正三位↓従二位↓正二位	参議・左兵衛督	参議↓樞中納言	樞中納言 ※離任翌年に薨去

世ルート」にのっているようにも見える。けれども、はたしてそうだろうか。たとえば、当該期間中に右衛門督を経ないで左衛門督になったものうち、大臣以上になったものを同じように確認してみると、藤原定方が右大臣、藤原仲平が左大臣、藤原師輔が右大臣、藤原顕忠が右大臣、藤原師尹が左大臣、藤原頼忠が太政大臣、源雅信が左大臣、藤原顕光が左大臣、藤原頼通が関白太政大臣となっており、むしろ右衛門督を経ないものたちの方が栄達しているのとらえることができるのである。たしかに、右衛門督から左衛門督を経ないで大臣以上になったものとして、藤原道長や藤原実資をあげることができるが、それらはあくまでも例外的な存在だといえ、そこには右衛門督につかなければならなかった個別の事情が考慮されるべきものと判断される。

こうした状況をふまえると、右衛門督より左衛門督の方が重くとらえられていたことは無論のこととして、右衛門督に任じられるということは、出世という観点からすれば華々しい栄達の道を歩んでいるというよりは、やや停滞しているといった印象を与えるものであったということができよう。しかも、藤原清経、藤原兼輔、藤原斉敏、源忠清、源伊陟の五名が右衛門督在任中に死去しており、右衛門督離任後一年以内に死去した源當時、藤原朝忠、藤原懷平の三名を加えれば、二十四名中、実に八名もの人物が右

衛門督在任中もしくは離任後一年以内に死去していることになる。左衛門督在任中に死去しているのが、藤原誠信一名であることに比しても、その数は右衛門督を特徴づけるものとなっているといえよう。

もちろん、右衛門督という官職とその在任者の死去との因果関係は明らかにはないし、両者の間に現実的な関連性を認めることは難しいだろう。しかし、ここで重視したいのは、右衛門督が不運や死といったものと結びつけられ得る要因を有しているということである。たとえばそれが偶然だとしても、偶然の集積はやがて現実を置き去りにして、新たな心象を創りあげていく。右衛門督の何かしら暗鬱な横顔。代々の右衛門督たちを知るものたちは、少なくとも「一つの出世ルート」にある人物とは異なる姿を右衛門督に想起したと考えることができるのである。

三 『源氏物語』における右衛門督

『源氏物語』における右衛門督もまた歴史に生きた右衛門督たちから自由ではあり得まい。柏木右衛門督以外にも『源氏物語』には右衛門督が存在するが、それらを検討する前に、まず左衛門督について確認しておこう。池田亀鑑編『源氏物語事典』（東京堂出版）の「作中人物解説」には五名の左衛門督があげられている。

まず一人目の左衛門督は、「紅葉賀」巻の朱雀院行幸の折に「宰相二人、左衛門督、右衛門督左右の樂のこと行ふ」と、右衛門督とともに語られる人物であり（「紅葉賀」①三二四頁）、「この左右衛門督は、宰相二人の兼官か」とされている。³¹二人目は、「左衛門督、権中納言なども、異御腹なれど、故殿の御もてなしのままに、今も参り仕うまつりたまふことねんごろなれば」とある（「少女」③五三頁）ように、左大臣の子で、内大臣の異母兄弟と考えられる人物であり、「少女」巻において五節を奉る（「少女」③五九頁）ものの「その人ならぬを奉りて咎め」があつたことなどが語られ（「少女」③六四頁）、「行幸」巻では「藤大納言」として大宮のもとに参上することが記されている（「行幸」③三〇五頁）。³²三人目は、「梅枝」巻において光源氏から明石中宮のための書を求められる「左衛門督」（「梅枝」③四一七頁）で、その筆跡は「筆のおきて澄まぬ心地」と評されている（「梅枝」③四二〇頁）。四人目は、「鈴虫」巻において光源氏たちとともに冷泉院に参上する人びとのなかに見える「左衛門督」（「鈴虫」④三八五頁）で、内大臣の子と見られている。³³五人目は、「宿木」巻において勾宮と六の君の三日夜の儀の宴に参加する「北の方の御はらからの左衛門督」（「宿木」④四一五頁）で、「北の方」たる雲居雁と同腹の兄妹と見られるこの人物も内大臣の子であると考え得るが、四人目の左衛門督と

は「別人であろう」とされる。³⁴

これら五人の左衛門督のうち、一人目と三人目は系図不明の人物であり、四人目と五人目は内大臣の子であると考えられるものの当該場面のみに登場する人物であるため、その全体像を把握することは困難である。そうしたなかで、二人目の左大臣の子息である左衛門督はその具体像を垣間見せてくれる。とくに「少女」巻において、夕霧の心情に寄り添いながら大宮の口から語られる「大将、左衛門督の子どもなどを、我よりは下臈と思ひおとしたりしだに、みなおのの加階しのぼりつつ、およすけあへるに」（「少女」③二三頁）ということばからは、左衛門督を含めた左大臣一族の権勢が拡大している有り様が感知され、また、「行幸」巻の「藤大納言」がこの人物であるとすれば、左衛門督を辞して大納言となる「出世ルート」にあることを読みとることができる。少なくともこの左衛門督には史上の左衛門督と同様の姿を認めてもよいだろう。

それでは右衛門督はどうか。同じく池田亀鑑編『源氏物語事典』（東京堂出版）の「作中人物解説」には、柏木を含め五名の右衛門督があげられている。³⁵

まず一人目は、空蟬と小君の亡き父の右衛門督である。

「これは故衛門督の末の子にて、いとかなししくはべりけるを、

幼きほどに後れはべりて、姉なる人のよすがにかくてはべるなり。……

〔帯木〕①九六頁

「帯木」巻においてすでに故人として語られるこの「故衛門督」は、のちの光源氏のことばにおいては「中納言」と呼ばれている（「帯木」①一〇五頁）ため、中納言で右衛門督を兼ねていたことが知られるが、光源氏によつて「宮仕に出だし立てむと漏らし奏せし」と語られる（「帯木」①九六頁）ように、生前娘の空蟬を出仕させる希望を帝に奏上していたとされる。⁽³⁶⁾ 右衛門督については参議が兼ねる場合が多かったものの、中納言が兼ねる場合もあり、また、

右衛門督在任中に参議から中納言に昇進するといった場合も見られるため、中納言兼右衛門督であつたということはとりたてて特徴的なこととはいえない。しかし、その死後、娘の空蟬が弟の小君を連れて受領の後妻に入らねばならなかったということも考慮すると、やはりこの故右衛門督にも暗鬱な表情を読みとらなければなるまい。そこには、たとえば、父の一族も早くに亡くなり、昇進の道にも限界が示されているといった不遇な状況までもが考へることができよう。空蟬の出仕は、そうしたなかで発案されたものであるが、たとえ出仕がかなつたとしても後見の脆弱さは空蟬に苦難ばかりを与えたのに相違なく、子どもたちを行く末を案じ、自身の不遇を嘆きながら死出の路に赴かねばならなかつた

父右衛門督の苦悶が想起されるのであつた。

二人目の右衛門督は、「紅葉賀」巻において左衛門督の一人目とともに登場する系図不明の人物、三人目は柏木であり、四人目は夕霧の子息であるが、「匂兵部卿」巻には、夕霧の子息である右衛門督が次のように語られている。

「親王たちおはします御送りには参りたまふまじや」と押しとどめさせて、御子の衛門督、権中納言、右大弁など、さらぬ上達部あまたこれかれに乗りまじり、いざなひたてて、六条院へおはす。
〔匂兵部卿〕⑤三四頁

「衛門督」が最初にあがっていることから長男とも見られるが、「柏木のごとく権中納言（四）は同人の兼官とみて、右大弁（五）以下を繰り上げれば、七郎までの序列は合うが疑問」ともされるように、⁽³⁷⁾ 他の子どもたちとの関係は判然としない。ただし、夕霧の長男が右衛門督であることは注目してよからう。「匂兵部卿」巻において、夕霧は右大臣として、長女を春宮に、次女を二の宮に入れており（「匂兵部卿」⑤一八〜一九頁）、その権勢に揺るぎがないか見えるが、それらの娘たちにはまだ子どもが誕生しておらず、のちの御代の外戚たる地位を確保するには至っていない。「宿木」巻において誕生した匂宮と中の君との男子が「東宮候補」な⁽³⁸⁾ ることが考えられるとすれば、むしろ夕霧一族の将来的

な没落さえ考えられるのであり、本来将来が嘱望されるべき夕霧の子息が右衛門督であることは、夕霧の権勢の陰りといったものをかたどっているように思われるのである。

五人目の右衛門督は、小野妹尼の夫として語られている。

なにがしが妹、故衛門督の妻にはべりし尼なん、亡せにし女子のかはりにと、思ひよろこびはべりて、随分にいたはりかしづきはべりけるを…… (「手習」⑥三四六頁)

この故右衛門督は「上達部」とされている(「手習」⑥三〇〇頁)ため、「衛門督は従四位下相当官で公卿ではない。同位の中将が参議を兼任することは多いので、これも同様の事情か」とも説かれるが、すでに見てきたように、右衛門督は参議ないしは中納言が兼ねるのが通例であった。だが、この故右衛門督も悲運の影をまとっている。ここで語られる「亡せにし女子」は、右衛門督が亡くなった後に小野妹尼が大切に育てあげ「よき君達を婿にして」いたものの亡くなってしまい、それが妹尼の出家の契機となったとされるのであった(「手習」⑥三〇〇頁)。

『源氏物語』に登場する五人のうち、二人が「故衛門督」として語られ、一人が右衛門督在職時に病にかかったのちに病没していることは、『源氏物語』における右衛門督を考えるうえで重視されなければならない。点描される一人の右衛門督を除いて、『源氏物

語』における右衛門督の行く手には滅びの道が見えるばかりなのであった。

悲運の右衛門督——。『源氏物語』の世界において、右衛門督はそのような姿をもって顕現する。そして、その右衛門督の姿をもっとも顕著なかたちで体现しているものこそ、柏木右衛門督なのであった。

四 右衛門督としての柏木

柏木がはじめて「右衛門督」と呼ばれるのは「若菜上」巻においてである。

……右衛門督の下にわぶなるよし、尚侍のものせられし、その人ばかりなむ、位などいまずこしものめかしきほどになりなば、なかはとも思ひよりぬべきを、まだ年いと若くて、むげに軽びたるほどなり。 (「若菜上」④三六頁)

女三の宮の降嫁先を悩む朱雀院の心内文のなか、「右衛門督」と呼ばれる柏木は、女三の宮への求婚者として語られる。ただ、「位などいまずこしものめかしきほどになりなば」とされ、さらに「まだ年いと若くて、むげに軽びたるほどなり」と認識されるように、柏木は年齢や官位の面において女三の宮の降嫁先としてまだまだ不十分なものとして朱雀院の目には映っていたことが知られる。

柏木は「宰相の君」とも呼ばれている（「若菜上」④一四四頁）ため、このときすでに参議兼右衛門督であつたと考えられるが、そのような身分では女三の宮の降嫁を受けることはままならなかつたのであり、柏木の忸怩たる思いは想像に難くない。

そうした柏木にとって、冷泉帝の退位と今上帝の即位という御代がわりは、望ましいことであつたにちがいない。

まことや、衛門督は中納言になりにきかし。今の御世にはいと親しく思されて、いと時の人なり。身のおぼえまさるにつけても、思ふことのかなはぬ愁はしさを思ひわびて、この宮の御姉の二の宮をなむ得たてまつりてける。

（「若菜下」④二二七頁）

「まことや」ということばによって久方ぶりに語り出された柏木は、このときすでに中納言になつてゐることが明かされ、あわせて「時の人」となつてゐることや女三の宮の姉である女二の宮の降嫁を受けてゐることも語られてゐる。柏木の「身のおぼえまさる」とことには、「今の御世にはいと親しく思されて」とあるように、やはり今上帝の意向が強く働いてゐることがうかがわせる。冷泉政権下においては、参議兼右衛門督という地位にあつて、「むげに軽びたるほど」との評価に甘んじなければならなかつた柏木は、東宮時代から「親しう参り、心寄せきこえ」ていた今上帝（「若菜上」

④一五七頁）の威光のもと、朱雀院の第二皇女の降嫁を受けるまでになつていたのであつた。

しかしながら、ここで注意されるのは、そうした威光をもつてしても、柏木はいまだ中納言にすぎないということである。むしろ、参議兼右衛門督であつたものが、中納言兼右衛門督になることは、史上の右衛門督の昇進から見て通例のものであつた。だが、もし今後も通例のままに推移していくのであれば、柏木は中納言兼右衛門督から左衛門督に移り、その後、大納言となつて人生を終えることになる。たしかに柏木は左衛門督になることなく権大納言に昇進するが、それは今上帝が「限りと聞こしめして」のことであつた（「柏木」④三二二頁）。柏木の権大納言への昇進は、死にゆく柏木に対する今上帝の特別な温情によるものであり、換言すれば、今上帝の特別な温情をもつてしても、目を見張るまでの柏木の栄達は望みようもなかつたということなのである。

現行の年立に従えば、柏木が中納言になつてゐることが語られた時点で、柏木は三十一〜二歳。今上帝即位とともに中納言となつたとしてもその年齢は三十〜三十一歳ということになる。ちなみに、今上帝即位とともに二十五歳で大納言兼左大将になつた夕霧が中納言となつたのは十八歳のときであつた（「藤裏葉」③四五四頁）。元服時に六位とされた夕霧は、「みなおのおの加階しのぼり

つつ、およすけあへる」柏木たちをうらやんでいたという（少女）
 ③（二三頁）が、今や両者の昇進状況は比べようもないほど逆転してしまっているのであった。

右衛門督たる柏木は、やはり昇進が滞っているように見える。しかし、それは、もとより柏木の個人的な資質や力量等によるのではなく、彼が属している家、もつといえは彼の父親に起因していると考えてよからう。神野志隆光はそのことに関して次のように述べる。

柏木の場合も、柏木その人というよりむしろ太政大臣家の問題からはじまる。東宮へのつながりといえば、太政大臣の異母弟である中納言が東宮大夫という官職の上でかわるのとはそれとして、髭黒における外戚関係や光源氏の場合に比べてはいうに及ばず、左大臣家に対しても、後宮の関係では決定的に弱いのが太政大臣家である。^⑪

柏木の父親は、たしかに太政大臣にまでのぼりつめた人物であったが、後宮政策においては常に光源氏の後塵を拝してきたのであった。冷泉帝に入内させた娘の弘徽殿女御は、光源氏の養女として入内した秋好中宮に絵合で敗れ、中宮の座に据えることはできなかった。また、今上帝の後宮については雲居雁を考えるものすずに夕霧と恋仲であったことから断念せざるを得ず、明石中

宮に対抗する術さえ持ち得なかった。太政大臣は冷泉帝の退位にもなつて致仕したが、田坂憲二は「結局、冷泉・当帝の二代に亘る後宮政策の破産こそが太政大臣を致仕に追い込み、この一族を政權から遠ざけてしまったのである。藤原氏内の実權も、次第に髭黒一族に移つていこう。ここに太政大臣は大きなツケを払わされることとなつてしまふのである」と述べたうえで、次のように指摘する。

太政大臣は柏木に女三の宮の降嫁を仰ぐことによつて春宮と結びつこうとしたがそれも叶わず、結局次代に向けて有力な足掛りを作つてやれずに、冷泉帝讓位と共に致仕せざるを得ない。致仕後も次善の策として、柏木に新帝の異母姉女二宮の降嫁を仰いだ、それは結局嫡男柏木を早逝させるのに原因を作つただけであつた。^⑫

娘を宮中に入れることが叶わなければ、女宮を宮中から迎えるほかはない。かつて太政大臣の父たる左大臣も宮中から大宮の降嫁を受けた人物であり、太政大臣はその大宮から生まれたのであった。しかし、太政大臣家への女三の宮降嫁はついに叶わなかった。太政大臣はまたしても光源氏に敗れたのであった。家の将来のために必要な若芽を次々と摘み取られていく太政大臣。光源氏の前にして彼はあまりに無力であつた。致仕の表を提出する太政大臣

の目には衰えていく自家の行く末が悲しく映っていたことであらう。

死に臨んだ柏木が今上帝から権大納言を賜った折、「大臣も、かく重き御おぼえを見たまふにつけても、いよいよ悲しうあたらしと思しまどふ」と語られる（「柏木」④三二二頁）。本来であれば現時点における柏木の大納言昇進は望むべくもなかった。今上帝の配慮を「かく重き御おぼえ」とする太政大臣の姿からは、太政大臣家が置かれているそのような状況を感じることができよう。「重き御おぼえ」を受ける柏木こそ自家の将来を託すべき唯一の望みであつたのであり、今、それさえも自身の手の届かぬところに消えようとしている。柏木を失う太政大臣の絶望はあまりにも深い。

不遇な太政大臣家。右衛門督たる柏木はそれを体現しながら生き、そしてそれを背負ったまま死んでいく。柏木の急逝を耳にした人びとは、その死の真相を知らない。だからこそその原因をさまざまに詮索することだろう。しかし、誰もが納得する原因は、誰もが知っている状況と短絡的に結びつけられ、やがてひそやかに語り継がれていくことになるのだろう。

五 子孫の途絶と怨霊

「右將軍が塚に草初めて青し」という詩句によって、柏木は藤原保忠と重ね合わされていたが、その保忠もまた不遇な一族に連なるものであつた。柏木の死をめぐって、藤河家利昭は「時平の一族の人々の不幸な死という事実が関わっている」と指摘するが、そこでいわれる「時平の一族」には保忠はもちろん、その弟の敦忠も含まれる。

『大鏡』には、藤原時平および子孫たちの不遇が次のように語られている。

さて後七年ばかりありて、左大臣時平のおとど、延喜九年四月四日うせたまふ。御年三十九。大臣の位にて十一年ぞおはしける。本院大臣と申す。この時平のおとどの御女の女御もうせたまふ。御孫の春宮も、一男八条大将保忠卿もうせたまひにきかし。……その御弟の敦忠の中納言もうせたまにき。和歌の上手、管絃の道にもすぐれたまへりき。

（新編日本古典文学全集『大鏡』八二〇―八三頁）
左大臣時平が三十九歳で薨去した後、時平の娘の女御、孫の東宮、そして長男保忠が没し、さらに保忠の弟の敦忠も死去したという一族のものが文字どおり次々と死んでいったさまがそこには

語られているのであった。もちろん、時平が没したのは延喜九年（九〇九）、保忠が承平六年（九三六）、敦忠が天慶六年（九四三）であることからすれば、間をあげずに死去したかのような印象を与える『大鏡』の語りには多少なりとも誇張が含まれているとしなければならぬ。しかし、時平三十九歳、保忠四十七歳、敦忠三十八歳というそれぞれの享年を思うとき、この命短き一族にはそうならざるを得なかった理由が求められることとなる。

「さて後七年ばかりありて」と時平の死を語る直前、『大鏡』は「このおとど、筑紫におはしまして、延喜三年癸亥二月二十五日にうせたまひにしぞかし。御年五十九にて」と語っている。この筑紫の地において死去した「おとど」こそ菅原道真なのであり、『大鏡』は、道真の祟りによって時平一族が短命のまま死に絶えていくさまを語っているのであった。

折口信夫は「家族の一部又全部、或はその系統にひき続いて祟りをする」⁽⁴⁵⁾霊物の存在を指摘したが、子孫が絶えていくとき、人びとはそこに悪霊の祟りを想起した。明石入道の父大臣についての風聞について、光源氏は次のように口に出している。

かの先祖の大臣は、いと賢くありがたき心ざしを尽くして朝廷に仕うまつりたまひけるほどに、ものの違ひ目ありて、その報いにかく末はなきなりなど人言ふめりしを、女子の方に

つけたれど、かくていと嗣なしといふべきにはあらぬも、そこの行ひの験にこそあらめ
（「若菜上」）④（一二八頁）

光源氏は、明石入道の父大臣が賢明な大臣として朝廷に仕えたものの「ものの違ひ目」の報いによって子孫がないなどとする人びとの噂があつたことを述べる。光源氏は「ものの違ひ目」といつてことを濁し、その具体的な内容までは語ることにはなかったが、この部分について『河海抄』は次のように注している。

忠文民部卿将門征伐の大將軍たりけるに勸賞の定ありける時清慎公疑しきをはおこなはされと申されたりけるを弟の右丞相刑の疑しきをは行され賞の疑しきをは行へとこそあれと申されけれどもつゐに沙汰なかりけり翌朝に民部卿右丞相に参して畏申て富家の券契を奉りけり家に歸りて手をにきりて立たりけるか十指の爪手のこうまで生出て血は紅をしほりたるやうにて（思）死にけりやかて悪霊となれり其故にや清慎公子孫は末なくなりて小野宮も他家へ伝けり（云々 若此事歟）
〔見旧記〕⁽⁴⁶⁾

忠文が「大將軍」として平将門の征伐にあたつた折、恩賞についての議論があつたが、藤原実頼の判定によってそれがかなわず、忠文は、握った手から「十指の爪」が甲を突き破り鮮血がしたるほど悔しがり、そのまま死んで「悪霊」となったといい、実頼

の子孫がなくなつたのはそのためであると逸話であるが、『河海抄』は「悪霊」によって子孫を絶やされた実頼を明石入道の父大臣に重ねている。『古事談』では、「小野宮殿をば、怨心を結び子孫を失はむと誓ひ、永く霊と成る」と語られ、⁽⁴⁷⁾実頼の子孫滅亡を誓う忠文の「怨心」の激しさを印象づけているが、ここで注目しておきたいのは、子孫を根絶やしにしていくなか、怨霊がいたというよりも、子孫が絶えていくとき、人びとはそこに怨霊の存在を認識したということである。

『栄花物語』は、藤原実頼の一族について、次のように記す。

この小野宮の大臣の二郎三郎、二所残りておはしつるを、三郎、右衛門督までなりたまへりつるもうせたまひにければ、今は二郎頼忠と聞ゆるのみぞおはすめる。まだ御位いと浅し。右衛門督の若うて上達部になりたまへりしが、かくてやみたまひにしかば、それに怖ぢて、すがすがしくもなしあげたてまつりたまはで。右衛門督の御子どもあまたおはしけるなかに、三郎をぞ、祖父大臣わが御子にしまひて、実資とつけたまへりける。敦敏の少将の君も、男子女子あまた持たまへりけるを、この祖父大臣ぞ、よろづにはぐくませたまひける。(新編日本古典文学全集『栄花物語』「月の宴」①三三頁)

すでに娘である村上天皇女御述子と長男敦敏を亡くしていた実頼

が、ここでは、「右衛門督までなりたまへりつる」斉敏も失い、その三男である実資を養子とし、敦敏の子どもたちも養育していることが語られている。「敦敏の少将の君も、男子女子あまた持たまへりける」の記述について、新編日本古典文学全集頭注が『「分脈」は佐理のほか、女二人を挙げる。「あまた」の表現は不適當」と指摘する⁽⁴⁸⁾のとおり、子孫は多いといえず、頼忠も関白太政大臣にまで昇るものの、円融天皇の中宮となった娘の遵子は皇子を得られずに「素腹の后」と呼ばれたという(新編日本古典文学全集『栄花物語』「花山たづめる中納言」①一一一頁)。

柏木の造型について、土方洋一は「菅公の崇りによつて早世した時平の子息のイメージを基盤にしている」と指摘しているが、⁽⁴⁹⁾『花鳥余情』は、太政大臣一族に実頼一族を重ねる。

或説云致仕のおとゝは清慎公の事に准して書とおほえ侍りかの右衛門督は敦敏の少将のおとゝにさきたちてうせ給にしことをおもへりすゑの紅梅右大臣は廉義公の昇進ににたり廉義公は弁少将右大弁経給ふとみえたり⁽⁵⁰⁾

柏木の父太政大臣の准拠として「清慎公」実頼をあげながら、「右衛門督」柏木について、敦敏少将がその父実頼に先立つたことをふまえていることを指摘する。「右衛門督」ということでいえば、実頼の三男である斉敏こそ「右衛門督の若うて上達部になりたま

へりしが、かくてやみたまひにしかば」と語られている人物であり、そのような人物たちの総体のなかから柏木右衛門督の姿がたどられてくるともいえようが、ここでは実頼一族も滅びゆく一族であり、人びとはそこに血筋を根絶やしにしていく怨霊の姿を想起したということに目をとどめておきたい。

そうした事柄を念頭において、柏木の父太政大臣の周囲に目を配ったとき、その死をめぐって着目すべき人びとの存在が浮かびあがってくる。まず、妹の葵の上。彼女は六条御息所の生霊に取り殺された人物であった。葬儀の折には「院をばさらにも申さず、後の宮、春宮などの御使、さらぬ所どころのも参りちがひて、飽かずいみじき御とぶらひを聞こえたまふ」とされ（「葵」②四七頁）、世をあげて惜しまれるその死は、実情を知らぬ多くの人びとにとってあまりにも突然のものであった。しかし、葵の上を苦しめる物の怪の正体については、「この御生霊、故父大臣の御霊」などの噂がすでに流れており（「葵」②三五頁）、葵の上の死後、葵の上を死の世界に引きこんでいったもののひとつとしてそのような霊物の存在が語られたことであろう。

また、太政大臣の正妻である四の君の父右大臣の死にあたっては「その年、朝廷に物のさとししきりて、もの騒がしきこと多かり」（「明石」②二五一頁）と「もののさとし」とのかかわりが示

唆され、同じように、太政大臣の父左大臣の死の折にも「その年、おほかた世の中騒がしくて、公さまに物のさとししげく、のどかならで」（「薄雲」②四四三頁）と「もののさとし」が語られていた。「もののさとし」は「神、仏など超自然力の啓示」であり、「託宣、卜占などによる他に天変、地異の類も霊格の意志を示すものと考えられたのであろう」ともされる^①。たしかに、右大臣や左大臣の死が祟りによるものであると語られてはいない。しかし、両大臣の死は、たとえば、「ものの違ひ目」が噂された明石入道の父大臣のように、政治的なものとのかわりが取り沙汰されたことであらう。

柏木の父太政大臣はそうした左右大臣家を継ぐものなのであり、柏木もまたその血筋にある人物である。ただし、いま問題とすべきは、三苦浩輔が「柏木も女三宮も六条大臣家に対立した左大臣・右大臣家の者として崇られ、滅ばされた」と指摘する^②ような状況が実際にあったのかどうかということではなく、柏木の不意の逝去にあたって、事情を知らない人びとがそれをどのようにとらえ、そして納得していったのかということである。

太政大臣家の子息である柏木右衛門督の死に接して、ほんとうのことを何にも知らない人びとは、だからこそ何らかの事情を穿鑿しないではいられまい。その折、人びとの脳裏に浮かんでくる

のは、右衛門督たるものたちの不運であり、そして、大臣家に崇る怨霊の存在であつたと考えることができるのである。

六 祀りあげられていく柏木

悲運の右衛門督、柏木——。「あはれ、衛門督」と慨嘆する人びとの脳裏には、そうした柏木が思い浮かべられていたことだろう。しかし、柏木自身は死に際し、女三宮にあてて「行く方なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ち離れじ」といった執念が籠もつた歌をおくり（「柏木」④二九六〜二九七頁）、そして、その死後、夕霧の夢のなかに死霊となつて現れる（「横笛」④三五九頁）。それらの事柄は、世の人びとに知られることはなかつたはずだが、弁の尼が薫に語ることばのなかに次のような文言が見られる。

知ろしめさじかし、このごろ藤大納言と申すなる御兄の右衛門督にて隠れたまひにしは。ものついでなどにや、かの御上とて聞こしめし伝ふこともはべらん。

（「橘姫」⑤一四六頁）

何かのついでに、あの「右衛門督」についての噂話などとして耳になさることもありましようかという弁の尼のことばは、柏木の実子である薫に対して、生誕にかかわる秘密を打ち明けようとする端緒として発せられたものであるが、故柏木右衛門督について

の噂話が密かに語られていたことを示唆する。それがどのような噂話であつたかは明確にはならないが、そこには柏木の死霊化に関わるものが含まれていたと考えてもよいのではなからうか。

思えば、柏木が右衛門督に甘んじなければならなかつたのは光源氏の威勢に太政大臣家が圧倒された結果であつた。また、柏木が死の床についたのは、光源氏の視線を浴びて帰つたその日からであつた。『無名草子』は光源氏が柏木を「果てには睨み殺したまへる」と評した⁵³が、柏木は光源氏によつて死の淵に追い込まれたとする見方が生じたとしても不思議ではなく、その場合、柏木は政治的な恨みをのんで死んだ人物の姿を帯びてくることとなる。

藤原実頼の一族に崇つたという藤原忠文は、右衛門督を経験した人物であつたが、やはり右衛門督を経験したことがある藤原朝成も、『大鏡』において、藤原伊尹との蔵人頭任官争いに敗れて「この族ながく絶たむ。もし男子も女子もありとも、はかばかしくてはあらせじ。あはれといふ人もあらば、それをも恨みむ」と誓い、⁵⁴「代々の御悪霊とこそはなりたまひたれ」と語られている。

政治的な敗者となり、死んでいつたものたちは、人びとに崇る可能性を感じさせる。柏木右衛門督もまた例外ではない。だからこそ、今上帝はその死の直前に「権大納言」の官職を与え、政治的執着を残さないようにしたのであらう。池田彌三郎は「崇るほ

どの靈なら、威力のあるものに違いない。だからそれは、敵にまわせば怖ろしいが、味方につければ有力な守り神となり、幸福をもたらしてくれる。こういう考えが日本にはある」と指摘するが、人びとの柏木追慕にもまた、柏木が祟る怨霊として出現する可能性を封じ込めながら祀りあげていこうとする心意を見て取ってよからう。高崎正秀は「矢・箭は共にく、鎮魂の聖器なる弓に番へて、対象に新たな魂を射込め、籠らすべき具でもあつた」と指摘するが、衛門府は「大化前代に弓箭を帶して宮廷諸門の警衛にあつた鞍負の職務を継承している」とされるように、右衛門督もまた靈物を鎮めるべき弓箭をその身に帯びるものであつた。

右衛門督たる柏木が、「右將軍」とされることもこうしたことと無関係ではあるまい。その多くが大臣・大納言から任命される近衛大将について、笹山晴生は、九世紀から十世紀には「榮譽職」となっていたことを指摘しながら「榮譽職であればあるだけに、大将に任命されることは貴族にとつて天皇の信頼をえて側近に侍する榮譽をになうことであり、自己の政治的地位を向上させることにもなった」と述べる⁵⁸。柏木を哀悼する人びとは、死んでいった柏木の姿を、「八条大将」「賢人大將」とも号された藤原保忠の姿で覆いつつ、その右衛門督という官職さえも榮譽ある近衛大将に置き換えてその記憶に留めようとしていくのであつた。

あはれ、衛門督——。そのとき、人びとのなかで、柏木は、弓箭を帯び、自分たちを守護してくれる凛々しい右衛門督として、美しい記憶とともに祀りあげられていく。そこには、祟られることによつて滅び去る右衛門督の姿も、死して祟り続ける右衛門督の姿も潜められる。そして、「あはれ」という言辭によつて、柏木の命をかけた愛執も、その悲劇的な人生も覆い隠されていくほかはない。

かくして、ひとつの柏木伝が顕現し、語り継がれていくことになる。柏木の「あはれ」を慨嘆する人びとは、しかし、ついに柏木の「あはれ」を知ることにはなかつたのであつた。

注 (1) 新編日本古典文学全集『無名草子他』小学館、一九一頁。

(2) 新編日本古典文学全集『無名草子他』小学館、二〇一頁。

(3) 袴田光康『無名草子』の柏木評 鈴木一雄監修・日向一雅編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識(三五) 若菜下(後半)』至文堂、二〇〇四年六月、二二三頁。

(4) 本居宣長『源氏物語玉の小櫛』『本居宣長全集』(四) 筑摩書房、一九六九年、二一九頁。高田祐彦は、こうした宣長のとらえ方について、『無名草子』の、柏木に対する「あはれ」を物語の主題につなげる形でおしひろげている」と指摘する(『柏木物語の主題』増田繁夫他編『源氏物語研究集成』(二) 風間書房、一

- 九九九年、一二三頁。
- (5) 『源氏物語』の引用は、新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館）に拠り、巻名・冊数・頁数を附す。
- (6) 新日本古典文学大系『源氏物語』（四）岩波書店、四三頁、脚注。
- (7) 新編日本古典文学全集『源氏物語』（四）小学館、三四一頁、頭注。
- (8) 清水好子「源氏物語の主題と方法―若菜上・下巻について―」山本登朗他編『清水好子論文集（一）源氏物語の作風』武蔵野書院、二〇一四年、三二五頁。
- (9) 後藤祥子「あはれ衛門督（鑑賞欄） 鈴木一雄監修・後藤祥子編『源氏物語の鑑賞と基礎知識（一五） 柏木』至文堂、二〇〇一年三月、一八七頁。
- (10) 日向一雅「柏木物語の方法」『源氏物語の準拠と話型』至文堂、一九九九年、二二一頁。
- (11) 玉上琢彌編『紫明抄 河海抄』角川書店、五〇一頁。
- (12) 蒲生美津子「藤原保忠」『国史大辞典』吉川弘文館。
- (13) 白川芳太郎「校訂職原鈔」『職原鈔の基礎的研究』神道史学会、一九八〇年、二六六頁。
- (14) 新日本古典文学大系『源氏物語』（四）岩波書店、四三頁、脚注。
- (15) 伊井春樹編『松永本花鳥余情』源氏物語古注集成（一）桜楓社、二五四頁。
- (16) 白川芳太郎「校訂職原鈔」『職原鈔の基礎的研究』神道史学会、一九八〇年、二六九頁。
- (17) 大日本古記録『貞信公記』岩波書店、七九頁。
- (18) 今井源衛「漢籍・史書・仏典引用一覧」新編日本古典文学全集『源氏物語』（四）小学館、五七五頁。
- (19) 新編日本古典文学全集『大鏡』小学館、八三頁。
- (20) 待井新一「右將軍」と柏木衛門督―詩句の物語的転用について―『相模国文』一七、一九九〇年三月。
- (21) 玉上琢彌は「柏木は権大納言に昇進したけれども、特別昇進でもあったし、衛門の督は、もと通りで、やめていなかったのであろう」とする（『源氏物語評釈』（八）角川書店、一五九頁）が、のちに見るように、柏木も権大納言昇進とともに右衛門督は辞していたものと考えられる。
- (22) 『倭名類聚抄 元和三年古活字版二十卷本』勉誠社、一九七八年、四九頁。
- (23) 笹山晴生「蝦負府」『国史大辞典』吉川弘文館。
- (24) 日本思想大系『律令』岩波書店、一八六頁。
- (25) 森田悌「平安中期左右衛門府の考察」『平安時代政治史研究』吉川弘文館、一九七八年、三三二―三三四頁。
- (26) 和田英松『新訂 官職要解』講談社学術文庫、講談社、一九八三年、一四〇頁。
- (27) 笹山晴生「檢非違使」『国史大辞典』吉川弘文館。
- (28) 『日本国語大辞典 第二版』（小学館）は、「衛門」の項において「うえもんふ（右衛門府）の略」をあげ、『故実拾要』一二の「此右衛門は名を唱る時右を略して衛門と唱る事故実也」という記事を載せる。
- (29) 家井美千子「右衛門督―『源氏物語』における―」『中古文学』三六号、一九八六年三月。以下、家井の見解は当該論文による。
- (30) 永井崇大「『源氏物語』衛門督攷―柏木論への視覚―」『古代中世文学論考』一八、新典社、二〇〇六年一〇月。
- (31) 新編日本古典文学全集『源氏物語』（一）小学館、三一四頁、頭注。
- (32) 「当時、大納言か（少女巻の権中納言との序列が記載順なら、藤

- 大納言とよばれている。河海抄は左衛門督(三)も同人かと疑っている。(池田亀鑑編『源氏物語事典』(下) 東京堂出版、三二五頁)。なお、「少女」巻において大納言であれば、すでに左衛門督は辞していることになるため、三人目の「梅枝」巻における「左衛門督」とは別人と見なければならぬ。
- (33) 池田亀鑑編『源氏物語事典』(下) 東京堂出版、三五二頁。
鈴木日出男編『源氏物語作中人物索引』新編日本古典文学全集『源氏物語』(六) 五七四頁。
- (34) 池田亀鑑編『源氏物語事典』(下) 東京堂出版、三二九頁。
空蟬の入内の可能性をめぐるては、春日美穂『源氏物語』空蟬の出自―桐壺帝への入内の可能性を始発として―(『國學院雑誌』一一七―一〇、二〇一六年一〇月)がある。
- (35) 池田亀鑑編『源氏物語事典』(下) 東京堂出版、三二九頁。
吉井美弥子『中の君の物語』『読む源氏物語』読まれる源氏物語森話社、二〇〇八年、二〇三頁。
- (36) 竹内正彦『夢のあとの明石中宮―一族物語の宇治十帖―』小山清文・袴田光康編『源氏物語の新研究―宇治十帖を考える―』新典社、二〇〇九年。
- (37) 池田亀鑑編『源氏物語事典』(下) 東京堂出版、三二九頁。
新編日本古典文学全集『源氏物語』(六) 小学館、三四六頁、頭注。
- (38) 神野志隆光『若菜上』巻への一視点―底流としての政治状況―『古代文化』二九一、一九七七年一〇月。
- (39) 田坂憲二『頭中将の後半生―源氏物語の政治と人間―』『源氏物語の人物と構想』和泉書院、一九九三年、八七―八九頁。
- (40) 藤河家利昭『藤原敦忠伝―柏木像の形成―』『武庫川国文』五、一九七三年三月。
- (41) 新編日本古典文学全集『大鏡』小学館、八二―八三頁、頭注。
- (42) 折口信夫「ものゝけ其他」『折口信夫全集』(一五) 中央公論社、一九九六年、三一六頁。
- (43) 玉上琢彌編『紫明抄河海抄』角川書店、四七六―四七七頁。
- (44) 新日本古典文学大系『古事談他』岩波書店、三九三―三九四頁。
新編日本古典文学全集『栄花物語』(一) 小学館、三三頁、頭注。
- (45) 土方洋一『源氏物語の言語の構造―テキスト論の視座から―』『源氏物語のテキスト生成論』笠間書院、二〇〇〇年、一四頁。
- (46) 伊井春樹編『松永本花鳥余情』源氏物語古注集成(一) 桜楓社、二五二頁。
- (47) 曾倉岑「ものざとし」池田亀鑑編『源氏物語事典』(上) 東京堂出版、五二二頁。
- (48) 三苦浩輔『六条御息所の怒りと左右大臣家』『源氏物語の伝承と創造』おうふう、一九九五年、六一頁。
- (49) 新編日本古典文学全集『無名草子他』小学館、一九九頁。
新編日本古典文学全集『大鏡』小学館、一八六頁。
- (50) 池田彌三郎『家に憑く怨霊』池田彌三郎著作集(一) 角川書店、一九七九年、二二七頁。
- (51) 高崎正秀『鎮魂歌とその周辺―神剣考序説―』『神剣考』高崎正秀著作集(一) 桜楓社、一九七一年、二四頁。
- (52) 笹山晴生『鞍負府』『国史大辞典』吉川弘文館。
- (53) 笹山晴生『撰関政治体制の形成と近衛府上級官人』『日本古代衛府制度の研究』東京大学出版会、一九八五年四月、二二六頁。
- (54) (本学教授)